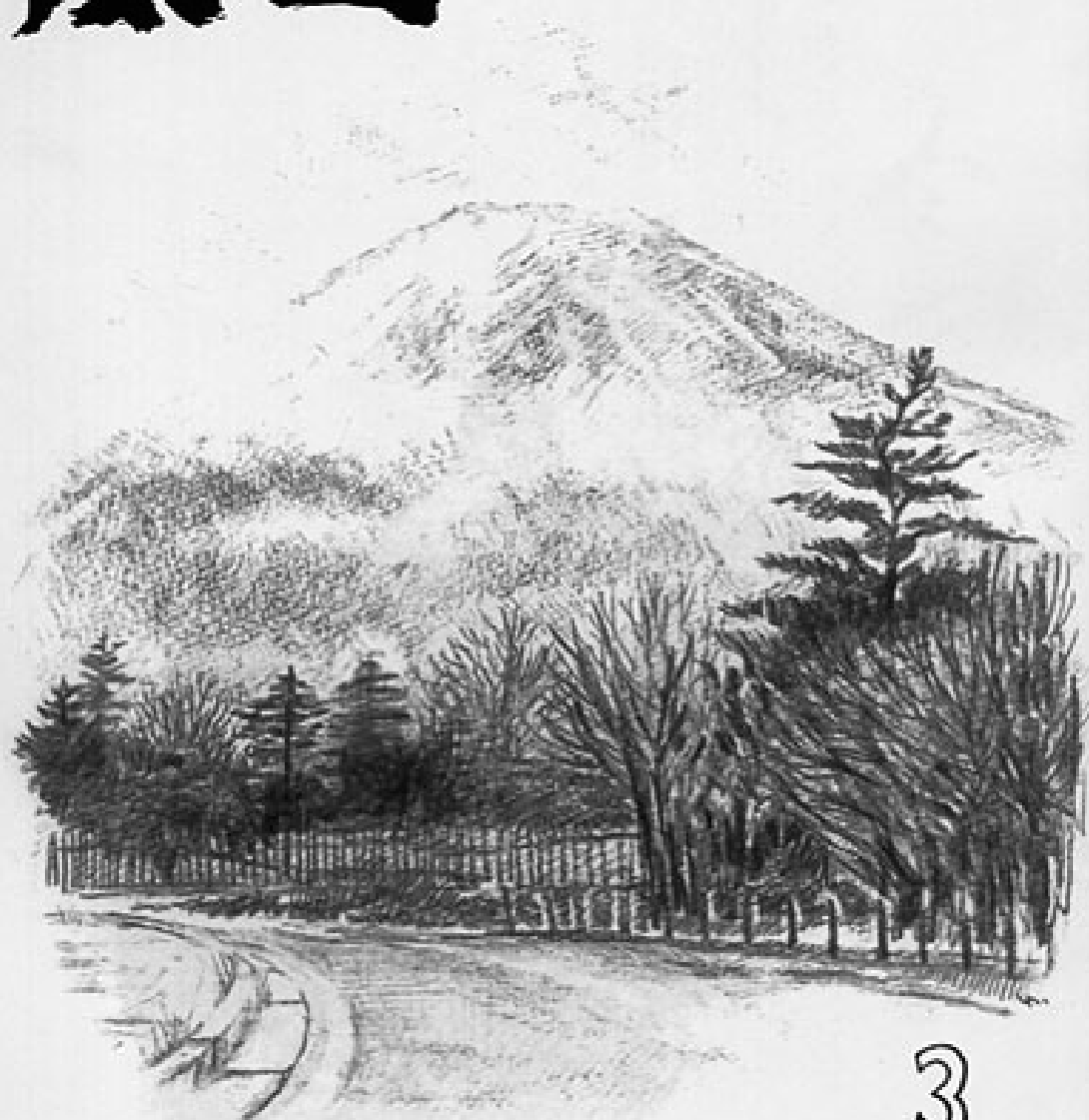


平成24年3月5日発行(毎月5日1回発行)
第52巻3月号(通巻632号)

風土



3

恵
方

神
蔵

器

石蹴つてとばす恵方の北々西

探梅や家の廻りを遠廻り

仏壇の中へころげて年の玉

誕生日玉のごとくに二月来る

光堂の世界遺産や竜の玉

鎌倉に千両万両藪柑子

石垣の上の大空寒椿

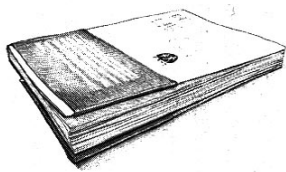
なきひとの微笑のほひ水仙花

弔文の稿大寒の灯をおごり

星一つ咲かせて冬の大櫛

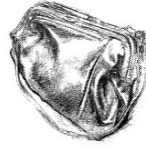
銅鑼打つて天くつがへす石鼎忌

冬桜誰がぐい呑みの黄瀬戸かな



竹間集

同人作品



数へ日

小林輝子

酔海鼠の切り口の藍青郵忌
生きのびしこと祝ぎ合ふや年忘
あかときの炬につぶやける冬至粥
年の数ほど柚子浮かべ出湯かな
雪女一邑の灯を袖囲ひ
ちやんちやんこ袖無猿子死語とせず
数へ日や雲の離れぬ山並ぶ

麦 蒔

小野寺節子

麦蒔きを見据ゑる男の喉仏
一年間の釣銭小銭は慈善鍋
雪雲の声する日裏日表に
未来坂の落葉掃きをする老爺
牡丹鍋ふしくれ指の箸使ひ
天に地に人に冬至の今日ありぬ
数へ日や身過ぎの昭和なつかしむ

冬 日

小林清之介

去年今年長小便の手を洗ふ
寒厨汚物流して年明くる
卒寿正月まだ生きてゐて菓飲む
三日はや枕にこぼす粉菓
四日はや転んで齒折る難の日ぞ
気の弱りが老け呼ぶ冬日居直れや
杖止めて笑みつつ西日振り返る

日が短ひただな寒

冬の虹 田村すゝむ

一ち日に三度も冬の虹に遇ふ
京都 近江八幡
小春日の近江あきんど通りかな
水鳥の走る近江は水の町
根本中堂
堂冷えて闇に不滅の灯りかな
燈台等に唯一残る
時雨れては林中に座す小瑠璃堂
塔寒し四天柱の曼荼羅図
数へ日や一日一句の日記閉づ

日向灘 瀬戸 悠

爪染めて今日一葉の忌なりけり
畑中の一基の墓も冬景色
首塚や枯鶏頭に高さあり
冴え冴えと夜空は星を育てをり
にゆつと出て油膜の水の蓮の骨
鳶の輪の中の灯台冬ぬくし
上昇の鷹に展られし日向灘

年用意 塩田 博久

オフィス屋コップの水を室咲に
クリスマスよりも嬉しき冬至かな
身ほとりのものを捨つるも年用意
天気図のまことしやかに寒波来る
来し方や冬木に倚りて風を聴く
シドニー二句
見はるかすユーカリの山青霞
ダイナークルーズオリオンをさかさまに

枇杷の花 代田 青鳥

海峽に警笛長し枇杷の花
神殿は海へ向きをり枇杷の花
村名の変わりてをりしびはの花
数へ日や留守番だけの役もらふ
薬袋の嵩張つてをり十二月
地球儀を買ふ十二月八日なり
ポロ市へ小さな駅が溢れをり

行人坂

— 田村すゝむ —

権之助坂のくすり屋松納め
白息を足して行人坂半ば
学園のドレメ通りや鳥総松
福寿草自然教育園咲く結界の石ひとつ
千両も万両もまた実を零し
小春日大田寺を浴びて五百の羅漢かな
枯銀杏立つ江戸城の裏鬼門
手袋を脱ぎし両掌の御撫で石
お七地を片手拝みに冬帽子
吉三こと名を西運に石路の花

山河集

同人作品



神蔵器選

煤逃げの夫は仏となりしかな

奥田 茶々

竹寝かす秋篠寺の時雨かな
訪ねゆく寺から寺へ冬田道

冬林檎人の恋しくなりし夜
冬ざれの涅槃図箱の長長し

白牡丹の菰につららや中尊寺

小林 共代

朱の鳥居百本ぬけて初御空
雪ばんば実朝越えし峠より

初景色しばらく富士に真向へり
歳の市父の背中の中のひろきこと

鎌倉に尼寺一つ冬すみれ

佐野つたえ

阿仏尼の墓の裏山冬枯るる
楚楚として立子の墓所に実万兩

極月や新式掃除道具買ふ
踏みたしと探し当てたり霜柱

柿の皮螺旋のままに干しにけり

田中寛有能

小春日の婦人部ばかりの野菜市
この冬を目立つ皇帝ダリアかな

枇杷の花散り急ぐなど浦のみち
月蝕の皆既となるや星冴ゆる

解きがたき南部絵暦北塞ぐ

石崎 浄

冬籠り琥珀の中の虫となる
炉あかりに座敷童子の膝小僧

みほとけに持仏のごとき冬至柚子
炉咄の立膝となる鬼女の影

◇特別作品◇(抄)

春を待つ

井口ふみ緒

冬 萌 や 櫻 は 翼 広 げ 立 つ
一 月 の 子 供 の 国 の ゲ ー ト 口
初 雀 樹 上 ふ く ら み ゐ た り け り
山 眠 る 地 球 丸 し と 思 ひ け り
寒 晴 る る 蒼 穹 広 き 下 に か な
皇 太 子 記 念 館 前 冴 返 る
子 供 等 の 画 く 地 上 絵 冬 木 立
冬 あ た た か 「 ふ れ あ い 子 供 動 物 園 」
餌 を 貰 ふ 乳 牛 の 目 の あ た た か し
春 を 待 つ 娘 と 向 き 合 ひ の 喫 茶 店

風土独語／神蔵器



煤逃げの夫は仏となりしか
な

奥田 茶々

煤掃きを始めると、

「ちよっと、出てくるよ」

と奥へ声をかけてご主人は普段着のまま出掛けた。近くの公園か図書館にも行ったのであれば二、三時間もすれば戻るであろうし、パーティや音楽会などであれば着替えをするし、一人で行くようなご主人ではない。殿方の中には釣堀で小半日過ごす人もあるという。そうした人も日が傾き、煤払いの済んだ家に灯の点る頃には、釣果のへらなど池に放って、手ぶらで元気よく帰って来る。

茶々さんのご主人弦鬼さんは、平成十八年七月十四日に、日赤病院にて逝去された。句帳の最後に

茶々よりも先に一本月の道

があった。この句の「一本の月の道」は、「弦鬼さんの人として生きる生涯の信条 略」端的に言えば、奥様への感謝と、自分の亡きあと奥様への励まし「言葉であろう」と、私は、「風土独語」に書いた。

茶々さんにとって、あの日のことは煤逃げであればよかった。「口今！」。いつもとかわらぬ笑顔が欲しかった。

雪女郎おとしてゆきぬ紐一本
松崎 雨休

降り続いた雪がぴたりと止んで、澄みきった空から青白い月光が音もなく降りそそぎかんかんといはれる。そんな夜の雪女郎が一番恐ろしいと言われる。しかし、この句は雪女郎の姿はどこにも見えず、ただ雪女郎がおとしていった一本の紐が、足跡の全くない氷りついた雪の上におちている。

この一本の紐は雪女郎の腰紐かしごきか、それとも人の首を括るために用意した紐であろうか。

雪女イたせし井水汲みにけり
桂郎

桂郎の句にはまだロマンがあるが、掲出句はゆえなく恐ろしい。

ぼろ市の大島紬にしつけ糸
森田 節子

奄美大島産のいわゆる本場大島であろう。何時も好んで着ていた祖父が亡くなつて形見にいただいたものか。その後、洗い張りをして仕立て直した、そんな大島紬が、しつけ糸のついたままぼろ市にひっそりと出されていた。

大島紬は染色と緋模様が精巧・強靱、かつ気品があり古雅なるところ他に追随をゆるさない。さらに何度でも水を通し洗えば洗うほど、組織がやさしく弾力が出て、仕立て直しの方がかえって肌をやさしく、着心地はまことによいものだ。

さて、「お値段はいくら」などと心配するのは下司の根性、真白いしつけ糸に注目したい。(以下略)

風土集



神蔵器選

比叡山より一ひらの雪便り 上尾 根岸 善行

我が心弾めば雪となりにけり
皇女墓の上の墓域や笹子鳴く
洪鐘や冬日に沈む東慶寺

フアインダーはみだす塔の寒さかな
月十旬日に一合の冬籠 佐倉 松崎 雨休

雪女郎おとしてゆきぬ紐一本
はや三日佐渡を見ざりき虎落笛
鞞のうづく踵をもち歩く
初雪やわたしは内科妻は外科
イマジンの流るる十二月八日 川崎 森田 節子

ぼる市の大島紬にしつけ糸
お白州の石は語らず落葉かな
年の市半紙ひと締め地に売られ
トラックの運ぶパトカー師走かな

成道会無想の時に加はりて綾部 綾部 田中富有能

探鳥の足もとに日矢冬いちご
老いの坂峠の長し日は短か
皆既蝕の月赤銅よ星冴ゆる
落葉積む山椒大夫の屋敷跡

門のかたき塔頭寒牡丹 川崎 鈴木庸子
こどもの国に全校マラソン息白し

一日は長く年行く早さかな
掘り上げしこんにやく玉に空つ風
食堂に買ふバス券や山眠る
残る柿みな啄まれ年暮るる 津山 生田 作

歳晩や厨に妻のメモ二つ
軒低き出雲街道大根干す
冬の日や櫛通りの空広げ
焚火の始末して大藪の風の音